# 月影

第60号

平成三十年三月六日発行
浄土宗西山禅林寺派
常林院

風の姿は
なびく草の
上に見える

---

ろうそくを灯(とも)し
香を焚(た)き
手を合わせる

供養するその姿に
亡き人を想う
気持ちが見える

供養の心は
浄土に届き

亡き人の心は
供養する人の心に
生き続ける

# 仏さま巡礼

## 毘盧舎那如来

### 大きな仏さま

毘盧舎那如来（びるしゃなにょらい）は、盧舎那仏（るしゃなぶつ）とも呼ばれ、蓮華蔵世界（れんげぞうせかい）におられる仏さまです。

奈良・東大寺の大仏さまに代表されるように、毘盧舎那如来という仏さまはとても大きな仏さまです。

なぜ、大きく造られるのか。それは、毘盧舎那如来がおられる蓮華蔵世界に理由があるようです。

### 蓮華蔵世界とは

蓮華蔵世界では毘盧舎那如来は、千枚の花からなる蓮の台座にお座りになられています。

その千枚の花びらの一枚一枚には大釈迦如来が千枚の花びらがある蓮台に乗っておられます。

そして、その千枚の花びらには、さらに一枚一枚に百億の仏の世界があります。

その百億の仏の世界には、それぞれ小釈迦如来がおられます。

この天文学的な、とてつもなく大きな世界を治めている仏さまなので、仏像も大きく造られるようになりました。

### 東大寺の大仏さま

東大寺の毘盧舎那如来は、高さが十五メートルもあるとても大きな仏さまなので「大仏さま」と呼ばれています。

大仏さまは聖武天皇の願いで奈良時代に造られましたが、長い歴史の中で度重なる戦に巻き込まれ、何度も燃えてしまい何度も修理されてきました。

そのため、奈良時代から残っている部分は、大仏さまが乗っておられる台座（だいざ）と、ひざ頭（がしら）の一部のみとなりました。

大仏さまができた当時は、政治の争いや、飢きん、凶作、地震や天然痘の大流行など、とても苦しい時代でした。そこで聖武天皇は仏教を政治の中心にして、国のために、人々のために大仏さまを造られました。

## あれこれ仏教用語

# 娑羅双樹（しゃらそうじゅ）

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす」

平家物語の冒頭で有名な娑羅双樹。「沙羅双樹（さらそうじゅ）」とも。「しゃら」はサンスクリット語「シャーラ」の音写語。シャーラの木は北インド地方に自生しています。二、三十メートルほど大きくなり、春さき、二、三月頃に白い小さな花をつけます。

お釈迦様はクシナガラの娑羅の林の中で入滅されました。その娑羅の木が南北に一対になっていたため娑羅双樹と呼ぶようになったと伝えられています。

娑羅双樹の白い花

## 仏教歳時記

涅槃図（ねはんず）の虎も泪（なみだ）す釈迦（しゃか）の裾（すそ）

石井大泉

**涅槃会（ねはんえ）**

お釈迦さまが入滅（にゅうめつ）されたとされる日（陰暦二月十五日）に、追慕報恩の為に行われる法要。

涅槃図（ねはんず）は、お釈迦さまが娑羅双樹（しゃらそうじゅ）の下で入滅された時、周りに弟子や鳥獣虫魚などが嘆（なげ）き悲しむ様子を描（えが）いた絵です。涅槃会の法要では涅槃図を掛（か）けてお勤めします。

涅槃図（常林院）

## 仏事の質問帖（しつもんちょう）

問「なぜ、お墓に樒（しきみ）をお供えするのですか？」

答　樒は、葉や枝から独特の香りを出します。昔、土葬の時代。野犬や動物が遺体を掘り返すことがありました。そこで臭いの強い樒を植えることで動物除けをしていました。その風習が今も残っているのです。

また、樒の香りは魔除けの効果があるとされ、悪霊から遺体を守るために供花として使われます。

ちなみに、樒は根から葉、花に至るまですべての部分に毒が含まれており、少量食べるだけで死に至る危険性があります。「しきみ」の語源は、その毒性から「悪しき実（あ）」と呼ばれていて、後に「あ」がとれて「しきみ」となったそうです。

**質問募集**

FAX 075-691-9658
メール info@jo-rin-in.jp

## 雑記抄

〜法灯を継ぐ〜

▽昨年末、先代住職の壱周忌と先々代住職の三十三回忌法要を勤めました▽組寺・法類寺院二十二ケ寺と総代の皆様に参詣していただき、滞りなく勤めることができました▽先々代住職が亡くなって三十二年が経ちましたが、当時のことは昨日のことのように鮮明に記憶に残っています。その後、先代住職と共に僧侶になり、檀家の皆様に支えられながら、気がつけば三十二年が経ちました▽仏教の教えを灯（ひ）に例えて「法灯（ほうとう）」といいます。「法灯を守る」とは、仏教の教えと、さらにお寺そのものを守るということです▽先代から受け継ぎ、また次の世代へオリンピックの聖火のように大切に引き継いでいきます▽二本の大塔婆を見ながら、三百五十五年間、歴代住職から受け継がれてきた「法灯」の重みを改めて感じました。

法要前の本堂内陣

ホームページ